

令和5年度海老名市中学生 人権作文・ポスターコンテスト 優秀作品集



市長賞 大谷中学校 二年
江口 円佳

海 老 名 市
海老名市人権擁護委員会

は し が き

海老名市人権擁護委員会は、人権思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、次代を担う多くの中学生の皆さんに、日常の家庭生活や学校生活等の中で得た体験に基づいた作文を書くこと、またポスターを描くことを通じて、人権尊重の必要性・重要性について理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身につけてもらうことを目的として、毎年人権作文及び人権ポスターを募集しております。

令和五年度は、市内の中学校から、五百四十二編の作文、三点のポスターを応募いただきました。いずれの作文、ポスターも中学生らしい純粋な感覚で物事をとらえ、人権の重要性について真剣に考えていこうという意欲が伺えるものばかりでした。この作品集は、入選した十四編、三作品を収録しております。一人でも多くの方に読んでいただき、人権尊重の精神が更に大きく広がる事を願ってやみません。

令和五年十二月

目次

◆ 作文部門

市長賞

見かけで判断しちゃいけない
紙をくしゃくしゃにする
同じ人間

大谷中学校 三年 成島 妃華 …… 2
海西中学校 三年 久保 未央 …… 4
海西中学校 三年 根岸 翼 …… 6

優秀賞

同じ人間なのに
感染症と人権について
「当たり前を求める権利を」
障がいと障害としない社会にするために
「普通」からはじまる
「大好きなお兄ちゃん」
病気と差別
「一人の『人間』として」

海西中学校 三年 家来里 さいな …… 8
柏ヶ谷中学校 三年 小松 哩子 …… 10
今泉中学校 三年 匿名 …… 11
海西中学校 三年 岩政 莉々佳 …… 12
大谷中学校 三年 岩見 悠花 …… 14
柏ヶ谷中学校 三年 杉山 風沙 …… 16
有馬中学校 三年 尾上 大瑚 …… 17
柏ヶ谷中学校 三年 匿名 …… 19



みんな違っているから良い

それぞれの責任

ピンクの傘の男の子

今泉中学校 三年 ロドリゴ デイシヤーニ

柏ヶ谷中学校 三年 丸 汐栞

柏ヶ谷中学校 三年 稲葉 聡吾

∴ ∴ ∴
23 22 21

◆ポスター部門

市長賞

自分らしさを大切に！



大谷中学校 二年 江口 円佳

∴ ∴
26 25

優秀賞

個性って楽しい！

自由

柏ヶ谷中学校 一年 橋本 紗知

有馬中学校 一年 遠藤 愛梨

∴ ∴
27 27

◆
作文部門



海老名市イメージキャラクター
えび～にゃ

市長賞

見かけで判断しちやいけない

大谷中学校 三年 成島 妃華

私は、幼い頃から産まれつき目が悪く、斜視弱視と診断された。物心つく前から視力をあげるため良い方の目をアイパッチで隠して生活していた。幼稚園に入る前までは何も感じていませんでしたが、入園してからは色々な友達に「何？ それ〜？」とよく聞かれるようになった。「斜視だからつけているの。」と言っても何も分かっていない表情をし、また次の日も聞いてくる。何度も繰り返ししているうちに、私は「みんな分からないのなら言うのをやめよ。」と言っていたらしい。他の子と違うアイパッチの事を聞かれる事が嫌になっていったと思う。デイズニールンドに行った際、並んでいると後ろの子どもがお母さんと私の目の事をコソコソと話していた。私は何もしていないのに、何で変な目で見られなければいけないのだろうと思っていた。間近でその光景を見ていた家族、特にお兄ちゃんはいつも私を守るようにしてくれていた。

今では、視力がグッと上がり、眼鏡をつけるだけで良くなった。でもまだ斜視は完全に治っていないため、裸眼になる時の見た目は気にしている。

他の人と違う人を見かけると、人間誰もが気になってしまおうと思う。デイズニーで並んでいた子どもも悪気なく、単純に気になってしまっただけ。だけれども、ちよつとした一つの行動が相手やその家族を傷つけている事を世界中の人に知って欲しい。私はこの目の事でいじめられた事はないけれど、世の中には他の子と違う見た目だからという理由で、いじめられている人は多いと思う。見た目の事は、その人が望んでなっている訳ではない。

よく考えてみれば皆分かるはずなのに…。

小学校三年生の時、私はミュージカルに出演した事がある。

『ランの宝物』という舞台で見た目でいじめられたり、化け物扱いされる主人公が色々な人達と出会い、そして大切な守るべきもの。友達を見つけて強くなる少年の生き方を描いた作品である。私はこの作品に出演した事が運命的な出会いだったと思う。

この作品のストーリー、そして歌の歌詞一つひとつに大切な意味が込められており、心に響くフレーズが数多くある。私はその中で『見かけじゃないさ』という歌が一番心を揺さぶられた。見かけじゃない見かけじゃない見た目で判断しちやいけないのさというフレーズがグッときました。私はこの作品を世界中の人に観て頂きたい！誰もが感動するこの作品で、この世の中が少しでも良くなってほしいと心から思う。

私はこれまでの体験を通して、この世には『普通』という言葉

葉は存在しないと思う。

なぜなら人間は産まれた時から、見た目・性格・考えなどが一人ひとり違うのだから決して普通の言葉はない。一人ひとりに自分なりの生き方、そして人権がある。他人の人権を潰すような人間には絶対なりたくない。人にされて嫌だった事は他の人にはしない。私はこれ以上、人権に関わるような事で、辛く苦しむ人を見たくない。どんどん減って行って欲しい。

そのためには、一つ目一人ひとりが相手の立場になって考えるから行動を起こす事。二つ目産まれてきた自分に自信を持って生きていく事。この二つが良い世界をつくるために大切な事だと思う。私はこれから今よりもっと過ごしやすい社会を実現させるために、自分に出来る事を一つひとつ確実にこなしていきたい。

『未来はきつとすばらしい世界になる』その想いを胸に日々生きていこうと思う。



市長賞

紙をくしゃくしゃにする

海西中学校 三年 久保 未央

「相手を尊重する」という言葉を聞いてあなたは何を思うだろうか。多くの人は、「認め合う」ことや「敬う」ことを言うと思う。

それでは次に、今、それをできているのかと問うとどうなるのだろうか。

この世には尊重の一方でいじめがある。

私は小学校四年生の頃に、一〇人くらいの男子からいじめを受けていた。ある日の掃除の時間の机を運ぶとき、その男子たちの一人が「この机運べよ」と他の男子に言った。

「この机」とは私の机だった。すると言われた男子は「やだよ笑菌がつくもん（笑）」と言った。私は色を失った。そのとき、自分がいじめの標的にされていることに気がついた。その後、私の「菌」について、私の持ち物に触ったら手を洗ったり、他の人に触れて「菌」を移すようなことをしている彼らを何度も見てきた。席が私の列と同じになると、プリントを回すとき、そのプリントをいわゆる「汚物扱い」して端をつまんで渡すなど、そのようなこともよくあった。

またある日、「ゴーゴー」と言っていた。

その「ゴーゴー」はどこからきたあだ名なのか。だんだんとわかってきた。当時の私は少し太っていて、小学四年生にしたら重いほうである「五五キログラム」の数字をとったものであろう。五五キログラムもないのに、見た目で決めつけられたのだ。そのあだ名を中学一年生の頃にもう一度言われた。教室にいたとき、「ねえ、ゴーゴー」と。相手は冗談半分で言ったはずだ。本当に傷ついた。かさぶたがついているところをまた怪我したかのように。

当時も今も「いじめアンケート」が定期的にある。毎回「ない」と回答していた項目は、小学四年生の年は「ある」と回答していた。これで解決すると思った。心の底から願っていた。でも解決しなかった。いじめはエスカレートするばかり。もう一つ薄幸なことがあった。当時の担任の先生が一身上の都合で休職することになったのだ。頼れる先生はその先生だけだった。

その後、私は本当に孤独となった。幸い、クラスに仲の良い友達が居て、楽しくなかったわけじゃない。でもその友達が笑っている姿を見ると、どこか自分が寂しく、羨ましくも感じた。その時期一番辛かった。毎晩ベッドの中で泣いた。思わず「死にたい」と呟いてしまった日もあった。渡さなかったけど家族に手紙を綴った日もあった。そして遂には、包丁の刃先を自分のお腹に向けてしまった日もあった。小学四年生の頃は、毎

日必死に生きた。

幾星霜を経て今日、私はこの作文を書くことが正直辛い。当時のことはできるだけ思い出したくない。ただひたすらに泣きたくなるし苦しくなるからだ。でも伝えなくてはならない。これを読んでいるあなたをはじめ、たくさんの人に知ってもらえたら、と思い書いている。

あなたは紙をくしゃくしゃに丸めたことがあるだろうか。多くの人がやったことのある行為だろう。それではその丸めた紙は、広げたときにはたしてきれいに戻るだろうか。いじめもそれと同じだ。受けた人の心はもう完全には戻らない。私だってそうだ。何気ない言葉でも、行動でも、簡単に誰かの未来を奪うことができるのだ。該当者でなくても、見て見ぬふりをすることは許されることではないと思う。

このような経験をしてきた私にとって、「誰もが尊重される社会」になつてほしいというのが、心の底からの願いだ。「互いを尊重し合う」ということは、尊く、素晴らしいことなのだ。



市長賞

同じ人間

海西中学校 三年 根岸 翼

様々なニュースが飛び交う中、僕には衝撃を受けたものがある。

数か月前、タレントのりゅうちえるさんが二十七歳という若さで亡くなった。女性と結婚し離婚、五歳の最愛の息子を残して旅立った。直接の死因となる背景は公表されていないが、りゅうちえるさんはジェンダーレスを公表し、新しい家族の形を切り開こうとしていた。りゅうちえるさんがなりたいたい姿へと変わっていくことを応援する人達とは反対に、「気持ち悪い・消えろ・息子がかわいそう」とネットでの誹謗中傷が絶え間なく続いた。

彼女の訃報を知り、我が家では驚きと悲しみの中、家族間で色々話し合った。

我が家ではジェンダーレスやLGBTQ+について話すことがある。その理由は、姉と僕の友達がトランスジェンダーであり、男性だが心の中は女性、外見も女性になりたいからだ。トランスジェンダーとは「性自認や性表現が出生時に割り当てられた性別と一致しない人」そんな彼女はとても明るく話し上手

でダンスも上手い。一緒に食事をとる所作が我が家の誰よりも女性らしく素敵である。その友達には今まで沢山の苦悩があった。学校でトランスジェンダーを隠さなければいけなかったこと、バイトの面接でトランスジェンダーを受け入れてもらえず男なのだから髪を切ってこいと言われたこと。日本のトランスジェンダーへの偏見、男は髪が短くという風習、世間の人々に得られない理解、これらの一つひとつが友達の心を傷つけ生きにくさを感じさせた。ただ、その友達の家族、僕たち家族を含めた周りの人は、彼女を理解し受け入れ、彼女が不当な扱いを受ける度、悲しい気持ちと共に納得いかない気持ちが強くなった。何故同じ人間であるにもかかわらず、このような扱いを受けなければならぬのかと。

そこで僕は色々自分なりに調べてみた。すると、このようなものがあつた。

日本では、今年六月二十三日に「LGBTQ+理解増進法」が施行された。だが、本来求めていたのは「差別禁止法」の制定である。「LGBTQ+の人が住みやすい国」を見てみると上位国には、差別禁止法が制定されている。そして、G7の中で唯一差別禁止法が制定されていない日本。これだけでいかに日本が遅れているのが分かるだろう。

「健康増進法」が制定され、喫煙所で煙草を吸っていない人たちが反社会的行為をしているかのようになったのと同じく、「差別」という行為は社会的に許されないという認識にするた

めに「差別解消法」を制定すべきである。この法律はとても素晴らしいと思う。これが制定されればLGBTQ+の人達以外にも生きやすいと感じる人が増えるからだ。

だが、数年前に比べ、変化したことがあった。それは、先に述べた姉と僕の友達の就職が決まり働く事が出来たからだ。「トランスジェンダーなのですが」と面接で話した友達に対して「大丈夫ですよ！」と採用が決まったのである。この出来事は僕たちにとっても嬉しいことだった。受け入れてくれた喜び、日本も少しずつ変わってきたのだと。

時々、髪が長く化粧をしている友達に対し子どもたちが「男なの？ 女なの？」と聞いてくることがあるそうだ。「どっちだと思う？」と笑顔で聞き返す友達。

ここである国の話をしよう。カナダでは同性婚をした男性が養子縁組をした子どももの運動会に行くと、男性同士や女性同士の両親がいる事が普通の光景であるそうだ。このように、日本でも子どもたちは髪が長く、化粧をしている男性を見ても、男か女かと問うことがなくなる世の中になって欲しいと思う。

姉と僕の友達が望む同性婚が認められる社会、LGBTQ+の人々が生きにくさを感じない社会を、国全体で作らなければならぬと思う。僕がそう思えたのは、身近にいてくれたその友達の苦悩を、目の当たりにしたからだ。

身近にいないから当事者の気持ちに分からないという人もいるかもしれない。だが、根本にあるのは、全ての人が「同じ人

間」ということ。

僕達は何があるかと「同じ人間」なのである。理解し受け入れ、支え合い、皆が偏見なく生きていける未来が、当たり前になつてほしいと思う。



優秀賞

同じ人間なのに

海西中学校 三年 家来里 さいな

私は、小学一年生と二年生の時クラスの男子にいじめられました。いじめられた訳が私が外国人だからです。最初は目の前で悪口を言われて、その時は全く気にしていなかったけど、ある日から口ではなく行動になっていきました。何もしていないのに蹴られたり、友達と話しているだけに腕をつねってきたり。その時、私はすごく悔しくてその場で泣いてしまいました。友達が慰めてくれたけど私は泣き止みませんでした。先生が来てくれて私はやっと泣き止みました。そして先生はその男子を叱りました。私はもういじめてこないと思って安心しました。でもやっぱりいじめは終わりませんでした。先生がいなくて悪口をたくさん言ってきました。

「うざい」、「気持ち悪い。」そんな言葉を毎日言ってくる。もう私は生きていく意味があるのか。そんなことを時々考えるようになりました。けど私は意地でもそんなこと思わない。絶対に思っちゃだめ。そう思いました。

ある日、その男子のことをクラスの半分以上の人が嫌っているというのを私は初めて知りました。そういえば、その男子

は私だけでなく他の人にもわざと蹴ったり、叩いたりしているのをちよくちよく見たことがあります。みんなもその人のことが嫌いなんだという変な安心感がありました。

気づけばもう三月。もう少しでいじめてくる男子とクラスが離れられる。私は二年生になるのがとても楽しみだった。そして、ついに二年生。クラス表を見ると、いじめてくる男子と同じクラス。クラスに行きたくない。もう最悪だ。悲しいというより、怒りで頭がいっぱいだった。でも仕方ない。クラスに行くしかなかった。その男子はいたけど、何もしてこなかった。一カ月、二カ月が経っても私をいじめてくることはなかった。これが本当の終わりだ。私はそう思って毎日が楽しくなった。でもやっぱり終わりじゃないんだな。

再びその男子からのいじめが始まった。また蹴られたり、叩かれたり、目の前で悪口を言われた。窓に押しつけられて、殴られたりもした。ある日の私の服装が「パジャマみたい。」と大声で何回も言われたり。私みたいな服装の人がいるのにその人には言わないで私にだけ「パジャマみたい。」と大声で何回も言われた。私はどうとう親に「学校に行きたくない。」と言った。親に「なんで。」と言われた。

「学校でいじめられているから。」なんて言える訳ない。けど親が「理由がないと休ませられないよ。」と言った。じゃあもう言うしかない。今しかない。「学校でいじめられているから。」と私は言った。泣きながら全部話した。すると「ごめんね。気づ

いてあげられなくて。」と言われた。私は大泣きした。

お母さんが学校に電話をし、担任に私が男子にいじめられていたことを話した。そしてその後日、その男子と男子の親に何回も謝られた。そして、もうその男子からいじめられることはなくなった。

今は中学三年生。その男子は他の人をいじめたりはしてないし、普通に過ごしている。

私も今がすごく楽しい。でも不思議。なんで人は何もしていない人をいじめめるのか。いじめをしてもいじめている側は得をするのか。いじめられてる側は全く得しないのに。

もし「今だけあなたの声が世界中の人に聞こえるよ。」と言われたら、私は世界中の人に問いかけます。なんで人はいじめをしたり、差別をしたりするの。同じ人間なのに。



優秀賞

感染症と人権について

柏ヶ谷中学校 三年 小松 哩子

未知の感染症への恐怖から生まれる差別や偏見。

二〇二〇年、全世界がこの負の感情にのみ込まれた。私もその一人だった。毎日増えてゆく感染者数におびえ、感染者を必要以上に遠ざけるようになった。同様な事象がかって日本でもあったことを知り、東京都東村山市にあるハンセン病資料館へ見学に行った。

そこは、以前患者の隔離が行われていたことを想起させる静かで緑豊かな場所にあった。

ハンセン病はらい菌による感染症であるが、昔の人たちはハンセン病になる原因を、神様を信じなかったせいだとか、人の不幸を引き受ける役目だからとか、親から子へと受け継がれる病気だから、などと考えていた。

そのため、患者さんは療養所へ隔離され、死ぬまで外に出ることができなかった。資料館の中で特に印象に残ったのは、重監房と呼ばれる監禁部屋だ。重くて厚い扉で、何重にも隔てられ、極寒の山の中で二十三人が亡くなったと言われている。それはまるで当時の差別や偏見の権化であるように感じた。これ

はハンセン病に対する知識不足及び理解不足と恐怖心が引き起こしたのではないかと考えた。

コロナによる差別や偏見も同じ構図だと思う。

一九九六年、「らい予防法」が廃止され、約九〇年続いた隔離政策がやっと終わった。現在のハンセン病療養所では、入所者は自由な生活を送っている。それは、患者さん自身が隔離によって奪われた権利を取り戻そうと立ち上がったためである。ただ、今もハンセン病が治った人たちとその家族への差別がなくならない。この問題は、社会全体で解決しなければならぬ。そのカギは私たち一人ひとりが持っていると考え

る。

現在ワクチンや治療薬の開発によりコロナは恐れるような病気ではないことが分かってきた。それに伴い、コロナ感染者への差別も減ってきたと思う。もし、コロナの治療薬やワクチンがまだ開発されていなかったとしたら、どうなっていたらだろうか。私はまだ差別が続いていたのではないかと思う。差別や偏見はしてはいけないと頭では分かっている、自分を守ろうとする本能により差別が引き起こされるのだと思う。

私はハンセン病資料館に行つて、痛感した。

病気がその人の姿やかたちを変えようとも誰もが平等にもち永久に侵すことのできない人権。そのことを、一人ひとりが自らの心に問いかけてみるのが大切だ、と。

優秀賞

「当たり前を求める権利を」

今泉中学校 三年 匿名

障がい者に必要な当たり前とは何かというテーマについて考えるために、過去に書かれた人権作文を読んでみて、私はこう思った。実際に差別やいじめを受けたり、差別が身近で起こっていたりしないとそれをなくしたいと思うことはないのだろうか。実際の体験を通して考えたことを伝えれば、差別は少なくなるかもしれないが、その裏では実際に傷ついた人がいるのはおかしいと思った

私の親戚には、小さい頃から障がいのある人がいる。だからこそ、障がい者は、障がいがあること以外、他の人と変わらないということ、自信を持って言える。ただし手伝いが必要なので、私たちと同じ一人の人間なのだ。でも、手伝いがなければ出来ることが少なくなってしまうことも知っている。彼は、たくさんの人に助けられながら、他の人と変わらない生活をしている。私は、それが彼にとつての当たり前で、どんな人にもそれが当たり前であればいいと思った。なぜなら、彼ら障がい者には、人の手を借りて普通の生活をする権利があると思つたからだ。けれど、彼の母は、「助けてもらふことを当たり前

とってはいけない。感謝するべきだ。」と言う。その言葉を聞いて、私はもう一度どんな当たり前があればいいのか考えた。そうすると、彼がなぜ周りの助けをもらえたのか、わかつた気がした。もちろん、まわりの人が助けることを当たり前と思つているからというのもあると思うが、単純に彼がまわりの人に助けを求める勇気を持つているからなのだと思う。助けを求められた私たちには、それに応える義務のようなものがあると思う。だが、すべての人が彼のような勇気を持っているわけではないのだ。ならば、彼らには当たり前前に助けを求められる環境が必要なのではないかと思った。そして、私たちは求められれば応えることを当たり前にしなればいけないと思った。

このように、誰かが傷つかなくても、私たちがどんな行動をするべきなのか、どんな行動をしてはいけないのか考えることができるのに、考えずに行動して人を傷つけてしまうことを不思議に思った。考えようとしなければ、考える機会をつくれればいい。でも、そのきっかけが「人が傷ついたので見たから」というものであつてはいけないと思う。誰も傷つかずにみんなが人権について考えることができれば、それが一番いい方法なのではないかと思う。そんな、誰もが知っていることが改めて大切だと感じた。私にできることは、手伝いを求める声に応えることである。私は、誰もがそうすべきだと思う。障がいがあつても私たちと同じ一人の人間なのだから。

優秀賞

障がい者としての社会にするために

海西中学校 三年 岩政 莉々佳

私が年長さんだった頃、同じクラスに腕がない友達があった。その頃の私は、障がい者という意識をもたず、一人の友達として接していた、と思う。その子は話せなかったけれど、ニコツという笑顔で、表情で、行動で会話ができていた、と思う。私の視線だから言い切ることができない。けれど、その子も会話できていたと思ってくれていれば嬉しい。

これは、もう九年前のこと。幼かったけれど、私にはすごく印象に残っている事がある。

健常者は食事をする時に手で箸を持つ。けれどその子に手はない。足の指にフォークを挟み、口まで食べ物を運んでいた。初めて見た私は、それはもう衝撃だっただろう。当時六歳の私は真似をした。しかし、どうやっても足が口に届かないし、足でフォークを使いこなせない。「すごい」と思った。その「すごい」はその子の技に対してなのか。それとも、障がいがあるのに自分よりもできることに対してなのか。当時はそんなに深く考えずに、とにかくすごいと感じたのだ。今、私がこの事を思い出した時に思ったのは前者だ。技に対して「すごい」と思えた

のは、自分が足の指での食事を体験していたからだろう。体験してみるとよって分かることは多い。足の指を使って食事をとれるようになるためにどれだけ努力をしたのか、どれだけ時間がかかったか。体験してみて初めて、当事者意識をもって考えられる。障がい者の方達にしかできないことも沢山あるのだ。もちろん、体験だけで障がい者の方達の気持ちを理解できるとは思えない。けれど、彼ら、彼女らの気持ちを知らうとする人が増えれば、障がい者への理解が広がる。そうすれば、障がい者の方達の生きやすい社会へと近づいていく。

もし、障がい者が八十五パーセントの世界に生きていたら、健常者が障がい者と呼ばれても不思議はない。このように考えると、障がい者、健常者の区別は必要ないように思える。私達はみんな人間なのだから。周りと違ってもそれはその人の大切な個性。障がいも一つの個性だ。個性をお互いに尊重し合い、支え合える人になりたい。

ところで、気がついただろうか。

この文章中の「障がい」の文字。「障害者」ではなく、「障がい者」であることに気がついたかということだ。私は今まで、「障害者」と書いて生活してきた。だが、人権作文を書くに当たり、障がいについてインターネットを活用して調べた時に気がついた。「障がい」と表記されていることに。「害」という字は障がいのある方を傷つけてしまうのではないかという考えから、ひらがな表記にされていたのだ。

しかし、調べるにつれて日本放送協会（NHK）が基本的に「障害者」と表記していることが分かった。「障害はその人自身ではなく、社会の側にある。障害者≡社会にある障害と向き合っている人だ。」と捉えているからだ。障がい者が生きにくいような社会こそが障害。たしかに納得だ。それでも私は、「障がい」を使おうと思う。言葉だけ変えても意味はない。けれど、言葉から変えることで、私のように疑問をもち、考える人もいるのだ。障がいがあることによる困難は、社会のしくみや制度が整っていないからだ。だから私は、障がい者についてもっと理解する。

この先の人生、自分がいつ障がいと共に暮らすようになるか分からない。

「障がい者」となる可能性は私達全員にある。そのため、私はできることは体験し、できないことは知り、考える。

お互いの個性を尊重し合い、支え合う社会にするために、障がい者を障害としない社会にするために。



優秀賞

「普通」からはじまる

大谷中学校 三年 岩見 悠花

「アメリカの学校で人種差別、受けたりしたの？」

私が小学三年生から五年生までの二年間を現地の学校へ通っていたことを知ると、よく訊かれる質問です。最近、いや随分と前から人種差別が問題視されているからです。質問をした人は心配と好奇心が混ざったような表情。私はこう答えます。

「私は全然、受けなかったよ。」

私の通っていた学校にはたくさんの子どもの国の子どもたちがいて、カフェテリアには在学中の児童の出身国の国旗が飾られているなど多様性にあふれていたからでしょうか。アジア人の私に対し、なんの抵抗もなくごく自然に接してくれました。分からない英語を教えてくれたり、逆に日本に興味を持ちアニメやスシを絶賛してくれたり。その頃は学校に通い始めてから間もなかったの言葉はまったく分からなかったのですが、歓迎されているのだと感じていました。おかげで半年も経つと不安しかなかった学校生活に慣れていきました。

やっぱり人種差別なんて昔のことなんだ。奴隷解放宣言が署名されてから約一五〇年、人種差別撤廃条約が国連で採択されて

から約六〇年。もう人種差別はないだろう、そう思っていたのですが。

私の住んでいたまさにその国で、白人警察官が黒人男性を殺害したというニュースをみました。警察官は男性をひざで圧迫し続けたのです。あまりの衝撃映像に目を疑いました。

やがて事件の波紋は広がっていき、ブラックライブマスターというプラカードを掲げ行進する人々。自分がテレビ越しに見ている国がつい数年前まで住んでいた国と同じであるということが信じられませんでした。広がっていく抗議デモなどについてさらに調べていると、私がアメリカにいた時期にも山ほどありました。黒人に対する差別だけではありません。アジア系の人に向けられる暴行や海外に移住した日本人も嫌がらせを受けている人もいました。私は幸いにも受けなかっただけで、現在も人種差別は根深く残っているのです。

ではなぜ差別は無くならないのでしょうか。

差別は、自分が社会の中で「普通」と考えることで安心感を得て、その輪から外れた人を「普通ではない」と見なし攻撃することです。これをみて思いました。「普通」なんて言葉があるから疎外される人が出てくるのではないか。私の通っていた学校は先生も含めほとんどの人が違う出身国で、「普通」が無かったように思います。そんな環境だったから私は差別を受けなかったのです。ならば「普通」を無くせば差別はなくなりません。普通を無くすには、固まった基準にとらわれない

ためにお互いの国の興味、関心、理解を深めその人の視点にな
つてみるのが大切だと思います。

私は、海外の人と接する機会が人生でこんなにも早く来ると
は思ってもいませんでした。

最初は海外になんて行きたくなかった。怖いし、未知の世界
だし。日本で安全に、言葉が当たり前に伝わる場所で暮らして
いたかったです。でも小さいうちから世界の広さに圧倒された
気持ちは簡単に味わえるものではありません。今となってはと
ても良い経験ができたと思います。グローバル化が進むこの時
代、日本を訪れる外国人も増えています。

日本は多民族国家に比べると外国人への免疫がないため、無
意識のうちに偏見を持つたり差別をしてしまうことも問題視さ
れています。日本も他人事ではありません。そのときに自分と
まったく違う人がいても、その人の視点になってみることに
これが広がっていけばやがて世界の人々の人権を守ることにな
がると思います。



優秀賞

「大好きなお兄ちゃん」

柏ヶ谷中学校 三年 杉山 凧沙

私には、いつもニコニコ笑っていて、歌うことが大好きな兄がいます。兄は、知的障がいという障がいをもっています。知的障がいとは、十八歳頃までの発達期で知的機能に問題がでて生活の中で不自由が生まれることをいいます。

兄は、赤ちゃんの時、胎盤剥離し他の子より小さく、呼吸器などが未熟なまま生まれてきました。呼吸器がしっかりできていないため、自分で呼吸ができず、二歳くらいまで入院していました。

やっと、小学生くらいから、通院しながらですが家で生活できるようになりました。喘息などで学校を休みがちになってしまい、学習が遅れが生じ、I Q 検査をしたところ知的・学習障がいが発覚しました。障がいが発覚しても兄は諦めず、学校に通っていました。

そして、高校三年生になり就職先を決めていたある日、泣きながら家に帰ってきました。話を聞くと、担任の先生から「何やりたいの?」と聞かれ、兄は「車関係の仕事につきたい。」と言ったのですが、先生は「お前には無理。もっと頭が良くない

とできない。」と言われ、目の前で夢を打ち砕かれてしまったそうです。

その後、就職先を決めるため、いくつかの職場に体験しに行ったとき、まだ体験だから仕事ができなくて当然なのに、その職員の方から、「あなたは仕事をするスピードが遅いから、ここでは雇えない。」と言われたそうです。その日の夜、泣きじゃくっている兄を見て胸が苦しくなりました。

障がい者だから、夢を持つてはいけないのでしょうか。誰がそんなことを決めたのでしょうか。私達と同じ人間であるのに、見下されてしまったり、不平等な扱いを受けるのは、おかしいと思います。障がい者だからといって一人の人間を傷つけていいわけがありません。

私は、春に福祉関係の職場に体験しに行ったのですが、たくさん話しかけてくださったり、明るい人ばかりでとても楽しかったです。

なぜ何も悪いことをしていないのに、未だに差別がなくならないんだろうと思いました。

これは、障がい者の方だけでなく、宗教・言語・地域に関する差別などすべてにおいていえることです。

一刻も早く、差別的な扱いがなくなるのもそうですが、少しでも多くの人に、現状を知ってもらい、障がい者の方や、外国の方々が暮らしやすいと思える国になってほしいです。

優秀賞

病氣と差別

有馬中学校 三年 尾上 大瑚

私は社会の授業でハンセン病について学びました。ハンセン病が流行った当時は、ハンセン病の恐ろしさから隔離されて、普通の生活が出来ず、そのまま亡くなってしまおうという人がたくさんいました。

私はその事実を知った時は「ハンセン病になりたくないの分かるけど、だからと言って隔離までして苦しい思いをさせなくてほならないことなのか、もっといい方法があったのではなか。」と思い、とても悲しい気持ちになりました。

人権というのは誰もが当たり前に持っている権利のはずなのに、何も悪いこともしていないのに、ハンセン病などの人の差別が生まれてしまうのか、皆同じ人間なのに、差別がこのまま増えてしまってはならない。でも、私一人の力で、世界の差別をなくす事はできません。

だからせめて、自分だけでも、差別をしないようにしようと思えました。

でも周りには、男女の社会参加や就職での格差が生まれていたり、黒人白人の差別、異国同士の戦争、高齢者、障がい者の

社会参加が出来ない、などたくさん差別が生まれてしまっています。

何も悪くない、なのに意見の食い違いや偏見などで、まるで悪者のように扱い、その感覚はなかなか消える事がないです。

差別された人はどんな気持ちになってしまおうのか、考え生活する事が大切だと思いました。

また、高齢者への差別ですが、私のおばあちゃんは私が小さい頃、よく遊んでくれていました。

一緒に買い物に行ったり、公園に行っては、走り回って、ピクニックして、とても元気に遊べていました。

だけど私が小学一年生のある日、突然おばあちゃんが倒れたと連絡がありました。

原因は脳出血でした。すぐにお母さんと病院に向かいました。

だけど病室には入れず会えたのは半年後でした。やっと会えて、車いすに乗っていたおばあちゃんは私に、「ごめんね、心配かけて、怖かったね」と悲しそうに言いました。

私は我慢していた感情が込み上げて来て泣かずにはいられませんでした。

リハビリが始まり、私は今まで以上に、おばあちゃんと一緒に行動する事が増えました。おばあちゃんにはリハビリ以外で動いてほしくなかったです。

常に気を使って、段々とおばあちゃんが回復してきているの

が分かり、うれしかった事をよく覚えています。

退院した後も、学校が休みの日はおばあちゃんについて行きました。

おばあちゃんは杖をついて、行動しなくてはなりません。

街を歩く人の中には歩きスマホや、並列走行、広がって歩く人達、またおばあちゃんのような体が不自由な人を嫌と思う人がいます。

特におばあちゃんは右半身が麻痺していて、自由な動き、突発的な動きはもちろんできません。

私はおばあちゃんのような不自由な人でも、不自由なく暮らしてほしいと思いました。

このような出来事から、私は、人が困っていたら出来る事は助けるようになりました。おばあちゃんは、私が助けるといつも必ずこう言います。「ごめんね、ありがとう。」

私は「ありがとう」と言っただけで満足しているわけではなく、役に立っているのはうれしかったです。

ただ、「ごめんね」は少し悲しかったです。

なぜなら、おばあちゃんは、私が助けているのを私に思わせてしまっていると思ってしまうのではないかと、でも、本当に一番つらいのは、おばあちゃん本人のほうなのに。

自分一人で出かけられるなら、誰かの力を借りずに、不自由なく動きたいはずですよ。

おばあちゃんが一番つらいのに私を心配してくれて、なんて優しい人だろうと思いました。

私はその心を忘れず、差別や、人に嫌な気持ちを見せず、おばあちゃんに教えてもらった、「優しい心」を大切にして、生きていこうと思いました。

どんな人でもその人の考え方、人生があります。

それを私が、貶す事は絶対に許される事じゃありません。

どんな時も相手の立場になって考え、相手や相手の考え方を理解する事が大切だと思います。

相手を良く理解して、偏見や、差別せず、生きて行こうと思います。



優秀賞

「一人の『人間』として」

柏ヶ谷中学校 三年 匿名

「男女共同参画社会」――男女ともに偏った考え方で行動や思想が制限されずに、個性や能力を發揮し、互いに尊敬し合い様々な分野で活動できる社会のことです。この社会の実現に向けて、現状や課題について自分で考えていきたいと思えます。

まず私が、『女性はくでこうあるべき。』という考え方がなくなっていない中で、政治家をしている女性は、どの位居るのかな。』と考えたのがきっかけでした。調べてみると、女性衆議院議員が一〇・〇%、参議院議員で二六・〇%と少ないことを知りました。女性の有権者が五一・七%なのにも関わらず、地方議会は一五・七%しか女性がいないことにも驚きました。

では、国際的に見るとどうなるのでしょうか。今年、一九〇カ国中の日本の順位を調べると、女性議員比率で一六九位になつてしまいました。日本以外の国も見ると、意外なことに先進国の欧米諸国が上位に居ませんでした。上位はなんとルワンダやアラブ首長国連邦です。ルワンダは、「指導的機関の地位のうち、三〇%を女性が占めるもの」と規定したり、規定に関わった法律を定めたりしているからだそうです。幾つもの紛争

で多くの命が奪われる中、残された女性達が男性が今まで担ってきた仕事に従事した影響もありました。

このように、世界で見ても経済的に貧しい国が行動を起こしているのを見ると、先進国を始めとして日本も女性が活躍できるように努められるのではないかと思えました。勿論、女性の活躍の場は政治参画だけではありません。近年は女性の就業者や管理職が増加傾向にあります。やはり役職が上位になるほど割合は少ない現状です。企業の女性役員数も増加はしましたが、一〇%未満と違和感を覚える結果でした。さらに、未だに約二割の企業は女性が居ないのです。時代が進み、少しでも女性には就職しやすくなったかもしれないですが、それでも学習や職場において苦勞を続ける人がほとんどです。

私が見たメディアの中に、年齢や性別を理由に大学を不合格にされた女性の話がありました。その女性以外にも多くの被害者が居たそうで、「不正入試は人生をねじ曲げるもの。」と提訴していました。私は、誠実に努力して来た人達の人生を狂わせこの行いに怒りを覚えてしまいました。同時に、選考する側の人がこのような対応をしたので悲しくなりました。二度と起きて欲しくありません。

これまでのことを踏まえて、日本はどうしたら理想の社会を実現できるのでしょうか。私は一人の女性として現代のニュースを観ていても、学習や職業の他に生活まで、女性の権利や存在が軽んじられたり、脅かされたりしてしまっている事件はと

ても多いように感じます。性別に関わらず誰もが向き合って、大切にすべき課題だと思います。ただ、気が遠くなる程の差別の歴史を見たら、解決は何年かけても困難な事かもしれません。しかし、この課題を放って暮らすのは嫌でした。

差別された人が苦しみ、見て見ぬふりをした人もまた差別を恐れて苦しむことになるからです。理想の社会とは程遠い社会なのです。

将来、何かのために取り組みをするなら、初めに選挙に参加したいなと思いました。若い十八才で選挙権が与えられ、国が国民に耳を傾けてくれる機会があるのだから、私はその権利をできるだけ良いものに変えたいです。

近年、若者の選挙離れをよく聞きますが、いくら自由でも与えられた権利を使わずに文句を言う人より、意味のある参画をしたいなと思いました。社会も性別も、思い込みに走らずに真摯に関心をもって生きたいです。



優秀賞

みんな違っているから良い

今泉中学校 三年 ロドリゴ デイシャーン

私は日本で生まれ、日本で育っている外国籍の中学生です。外国人の中には、日本語が話せる人とそうでない人がいます。文化や言葉、生活習慣などが違うことによる偏見や誤解で、教育や労働などというジャンルにおいて、外国人の人権に関係するトラブルが発生しています。教育の面では外国人であること日本語がわからないことから子供がいじめに遭っています。実際に私もいじめに遭ったことがあります。労働の面では、働く期間や場所が一定でない。周りの人に比べて給与が安いなどの差別がみられます。地域の生活では公衆浴場の入浴、マンションやアパートなどの入居を断られることがあります。私の家族も何度も外国籍だから入居ができないことが多くありました。私は、国籍など生まれた環境などで区別するのは良くないと思っています。すべての人を枠に入れる必要はないと思います。外国人だけでなく、周りとは少し違うからという理由でいじめられる人もこの世界には多くいます。今の世の中は、とても変化を起していると思います。本当の自分を魅せられる世の中だと思えます。なのに自分を魅せたら多くの批評がきます。それは偏見

や勝手な考えからくると思っています。認め合う事が欠けていると感じました。みんな一人ひとり自由に自分らしく生きられる権利があるのにその権利を他人が傷つけることは絶対だめだと思います。

そして、「いじめや差別は完全に消えない。」という言葉をよく聞きます。たしかに完全に消えないと思うけど、それは、今の世代の人達の考えが消えない方向になっているからだと思えます。「違う」という言葉の捉え方でそうになっていると考えました。数学で答えが、「違う」なら、使い方は合っていると思えます。でも人に違うという言葉を使うと、周りとは何が違うから変という風に捉える人が多いと思います。だから、周りとは違うから変と考えるんじゃないかと、周りとは違うから良いと考えた方が、いじめや差別は無くなると思えました。でもこの考え方で、いじめなどを消すのは難しいと思えました。だから、一人ひとりの考えを良い方向にしなければいけないと思えました。

周りとは違うから良いという考えを大事にして、外国籍などといったことからいじめが起きないように願います。一人ひとり違うから輝けると思えました。誰でも互いを認め合い、今の世の中が良くなれるように心から願っています。

優秀賞

それぞれの責任

柏ヶ谷中学校 三年 丸 汐葉

高齢者は若い人よりも病気のリスクが高く注意力も低く弱い立場にいます。今の時代、高齢者の数が増えその家族が介護をすることになります。しかし、問題になっているのが介護の放棄、親族による暴力、暴言などです。

なぜこうなるのか、うまく回らないのかを体験を元に関わり方を考えてみました。

私の家は祖父母と両親と子どもの三世代家族です。祖父母は何か大きい病気を持っていたり、認知症だったりなどはありません。しかし世代が違くとズレを感じたり不快な思いをしたりもします。例えば、祖母は事あるごとに「女の子なんだから」と言ってくる。

私はそういう時代だったのだなと思うのですが、やはり毎回言われると「なんで？」となります。また、祖父は喜んで人の話を聞かないことがよくあります。それに納得しないので、もっと柔軟な思考に直してほしいとあります。きっと、世の中の人もたえられなくなった人があるんだと思います。だからといって高齢者の人権を尊重しないということにはなりません。

せん。解決方法はあると信じています。祖母はよくストレッチをしていて背が曲がっていません。これも体を保つ方法で、すごいと思っています。また、私も言い間違えや聞き間違い、記憶力改善のために一緒にオセロをしたりトランプをすることもあります。こうすることで交流と今後のリスクを減らせる可能性が上がると思います。

祖父はゴミ拾いの仕事をしています。夏は熱中症がこわいですが、仕事仲間もいて良い刺激になっています。

私は一緒に暮らしていて良いところも悪いところもお互い知っていますし、健康でいてほしいと常に考えています。しかし課題は核家族が多く、こういう人達はどうかやって接していくかです。簡単なことだとママに電話をしたり会いに行く、高齢者が趣味を見つかるなどです。けれど、若者にだって人生があります。いつでも高齢者を優先できるわけではありません。私だって仕事があったら生活のために仕事をとると思います。なので必ずしも世話をできていない人が悪いわけではないので、悩んでいる人は自分を責めないでほしいです。

高齢者は若い人の助けを必要とする存在です。一人ひとりに人権があり尊重しなくてはなりません。そこで、どちらか一方に押しつけ合うのではなく、お互いが気をつけ合って快く過ごせるように努めるのが、家族をつくった責任とお世話になった責任だと思います。

優秀賞

ピンクの傘の男の子

柏ヶ谷中学校 三年 稲葉 聡吾

「さくらんぼ柄のピンクの傘と長ぐつ」は僕が幼稚園の年少のころのお気に入りでした。

お店で見つけて「これがいい」と自分で選んだそうです。理由は「おいしそうだから」でした。母は「おいしそうと思うのに、男の子も女の子も関係ない」と思い、僕が選んだ傘と長ぐつを買ってくれました。

僕の家にはピンクシャツデーのTシャツがあります。気になつてピンクシャツデーの始まりについて調べてみました。カナダの中学三年生の男の子が学校にピンク色のポロシャツを着て行ったら、いじめられてしまいました。それを知った上級生を中心に、翌日からピンク色を身に付けた生徒であふれかえつたという出来事からピンクシャツデーが始まりました。この話を知って、外国でも男の子の色、女の子の色という認識があることに驚きました。

これは一種の男女差別だと思えます。男女差別は男性と女性のそれぞれに対する固定概念があるから引き起こってしまうと思えます。

「今日は〇〇の誕生日だから、俺が家事するよ！」これを言われたら嬉しいと思う女性や、言ったことがあるという男性はきつと思えます。しかし、僕の母はこの発言が嫌いだそうです。「何でいつも当たり前に自分がやっていることを、誕生日の日だけ、あたかも特別なことかのように、少しやっただけで満足するのか」と思うそうです。僕はこれに対して「さすがにひどい」と思いました。

しかし、一理あると思います。なぜ男性が家事をすることは特別と捉えられがちなのでしょう。

また、世の中には「イクメン」という言葉があります。「イクメン」とは積極的に育児を行う男性のことです。しかし、世の中にはこの言葉をあまり好んでいない人が一定数います。「親が子育てをするのは当たり前なのに男性だけがほめられるのはなぜか」と思っているようです。

このように「男性は仕事、女性は家事や育児」という固定概念が今も残っています。しかし、少子高齢化が進む今、共働きが家庭が増えていきます。そんな中、女性は仕事と家事や育児の両立が大変になっているのではないのでしょうか。「女性だから」もしくは「男性だから」ではなく、「家族だから」協力していくことが大切だと思えました。

僕は学校でスラックスをはいている女子は見たことがありませんが、スカートをはいている男子は見たことがありません。そもそもこの活動はジェンダー平等を目的として始まったもので

す。しかし「男子はズボン、女子はスカート」という固定概念があるため「恥ずかしい」と思っている人がきつと思えます。そのため「男子だから」もしくは「女子だから」ではなく「今日暑いからスカートにする」「寒いからズボンにしよう」と言えるようになると思います。

このように、この世は男女差別であふれかえっています。「男だから」「女だから」という固定概念をとりはずすことができれば、性別にとらわれずに自分の好きなものを身に付けたり、自分の好きなことや、やりたいことをしたりすることができるようになると思います。僕はそんな社会になることを願っています。



◆ ポスター部門



海老名市イメージキャラクター
えび～にゃ

市長賞

自分らしさを大切に

大谷中学校 二年 江口 円佳



優秀賞

個性って楽しい！

柏ヶ谷中学校 一年 橋本 紗知



優秀賞

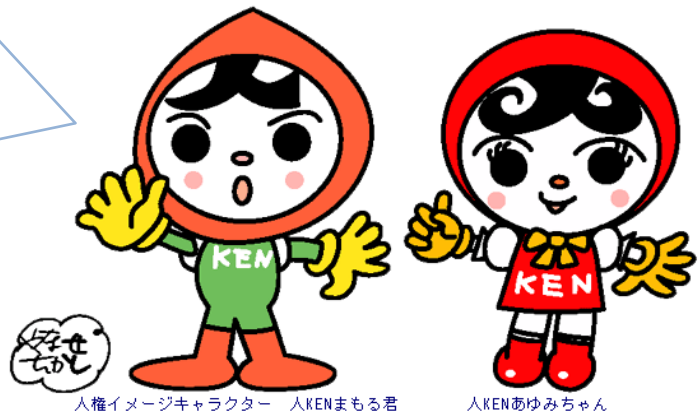
自由

有馬中学校 一年 遠藤 愛梨





市ホームページで
人権情報発信中です！



人権イメージキャラクター 人KENまもる君

人KENあゆみちゃん

令和5年度海老名市中学生 人権作文・ポスターコンテスト 優 秀 作 品 集

令和5年12月発行

編集発行 海老名市 市民協働部 市民相談課
人権男女共同参画係
海老名市勝瀬 175 番地の1
電話 046-235-4568 (ダイヤル)

